三二四号　平成二十一年七月二十日――長崎歴文協短信――

ながさきの空

結城了悟神父の追悼

越中　哲也

ディエゴ 結城 了悟 神父

長が私に「あなたには良き友がおられるので副理事長にお願いされては」と言われる。頭取が其の「良き友」と言われたのが二十六聖人記念館長結城了悟神父様であられた。早速、私は結城神父様の処に出かけた。神父様と私は一ツちがいで、昭和三十六年神父様が初めて二十六聖人記念館建設のため西坂に来られて以来お世話になっていた。

今年（平成二十一年）三月東京のキリシタン文化研究会の会報一三三号として特集結城了悟神父追悼号が出版された。この時、私にも急いで文章を送るようにとの連絡をうけた。それは私がやっと病院から退院してきた時であった。

追悼号は

Diego Pacheco Lopez de Morla　結城了悟略歴　に始まり、一九二二年十月十七日、スペインに生まれる。一九三九年九月七日　イエズス会入会、一九四八年来日、日本語を勉強、広島のイエズス会修練院…そして次に「神父研究業績一覧」がつづいていた。その第一項は新聞発表の論考で、「アルメイダの碑によせて」（長崎新聞　一九六八・九・七　夕刊）以来二〇〇三年一月十九日「長崎の教会群を世界遺産に…」まで五十三回を数えた。第二項は研究論文他であった。これ等を合計したら其の数五二〇項目を数えた。是等論考を純心大学片岡千鶴子学長は纏められ、神父様の功績を称えられて次のように記しておられる。

一、西坂殉教地の守り人。二、長崎キリシタン文化研究の羅針盤。三、歩く歴史研究家であり神父様であった。四、神父様への拍手が空に広がった。

神父様が神の身許に旅立たれたのは昨年（平成二十年）十一月十七日であった。私は其の時、ちょうど長崎市民病院に入院し動けなかった。

昭和五十七年五月長崎歴史文化協会が十八銀行清島省三頭取を会長に私が世話役に任命され、同月二十一日発足の日を迎えた時、会館建設のため西坂に来られて以来お世話になっていた。

中島川水辺の表情（二）
―河童と大学生―

古屋　陸夫

金は無いけど、暇ありの当方。中島川公園を散歩していると「あのう、ちょっといいですか」と言う。「うん、なんですか」と言うと、「河童、知ってますか？」と聞く。「河童ねぇー」と呟きながら相手を見ると、スリムな若者二人。「学生さん？」「はい、そうです。河童について調べています。河童知ってますか？」と言う。

そうして大学生は、持参の携帯マイクを、私の口もと近くに差し出した。よく見ると、もう一人の学生が、録音器ＢＯＸを肩からぶらさげている。「録音するとね」少々驚いて聞くと「はい、録音させて下さい」「おい、おい！録音される程、河童のこと詳しくないよ」「知ってるだけでよいです」「ぼくが話しても教材になるとは思えんがなあー」「いいです、いいです」と言って二人は、真剣な面持ちで、マイクを私に向けてかまえている。

「この川下の袋橋近くに、漫画家清水崑（こん）さんの子くじらに乗った河童の記念碑があるよ。崑さんは君達も知ってるだろう？」「いや、知りません」「有名な長崎出身の方だよ。そうか、君たちとは時代が違うからね。後で見に行くとよかよ」「はい、そうします」「ああ！そうそう、河童のことなら、もう一つあるよ。今度は上流の方に、中島川の河童洞というてね、かっぱ地蔵が三体、祀ってあるな」「この川に河童がいたんでしょうか？」「大昔の話だからね！当時はこの川も、うっ蒼としていただろうから、なにか出そうな？」などと私は小声で呟いた。

ここで私は、はたと、この質問者たちの気持に思い至ったのである。まさか当方を、江戸時代の人間だと極め付けて質問しているのではないのかと。確かに私は彼等よりも半世紀位の年令差はある。しかし生まれは、明治でも大正でもなく、昭和も二桁の生れなんだ。もう一度、私は学生たちをまじまじと見た。相当無理すれば、孫の年代と、いえなくもない。私から見詰められて学生は緊張し、真剣な面差しで「河童は、なにを食べるのですか」と聞いてきた。全く私は江戸時代の人間にされているのだろうか？当方は見た目には、大いにふけてみえる。一度九十才台の人と同列にされたこともある。学生達はまたマイクを口もとに差し出した。

私は中島川に目をやりながら「ほうら！鯉や鮒がいるやろ。河童は鮒なんか食べたんじゃなか？一説にはきゅうりとも言うがね。河童巻は寿司だが、人が食べるよね」「鯉は違うんですか」「うん、鮒はね、有史以来の先住民だがね、ここの錦鯉たちは、昭和年代に放流されたから、河童が居た時代には、この鯉は居なかったはずだよ」「うわ～っ、やっぱー、昔の人はよく知っているなぁ！」「おい！昔の人だなんて、私は江戸時代じゃないからな」二人はきょとんとして顔を見合わせる。

ややあって学生はもう一人に、真剣そのもので「やっぱり河童は居たのかもしれんね」相手は応えて「分からんけど、河童って想像上の動物じゃないのかな。竜みたいにさ」二人はそんなことを話し合っている。私はそれを聞いて、なあ～んだ分かっているじゃないか。うんユーモア、ユーモア。大体河童は想像上の動物だから、なにを食おうが食うまいがよいのである。「今録音したのは？」「サークルで発表します。これならサークル賞もらえると思います。社会勉強のための録音ですよ」「なる程ねえー。よいことだ」「えー、えー、今日はありがとうございました」そう言って一人が、なにかごそごそ手荷物を探りだした「これあげますので飲んで下さい」と酒のワンカップを出すのである。なんと利口な学生だろう。当方が酒飲みであることまでお見通しとは「ところでどこの大学なの」「長崎の大学です」「そうかぁー、酒がお土産だなんて、相当レベルの高い大学だね、ありがとう。記念碑と河童洞を見て行くように」「はい！必ず取材して帰ります」今様スリムハンサムな青年達は上流に向かって行った。

平成〇年セミふる午後、中島川散歩の道すがらでありました。

（九州文学同人、長崎市住）

風信

○本稿がお手元につく頃は梅雨もあけ、美しかった紫陽花も終り、夏の土用に入っているのではないだろうか。今年の夏の土用は七月十九日より始り、其の日は「丑（うし）の日」だという。鰻を食べに行かねばなりませんね。

○先月・六月十八日（木）第二十七回長崎歴史文化協会役員会開催、株元事務局長より先ず平成二十年度行事報告があった。来訪者三、〇四〇人、講師依頼一二一件。調査依頼・問い合せ八十二件、機関紙発刊毎月一回（十二号）、ながさきの空特集二十号発刊（七、〇〇〇部）、史跡見学旅行報告。次いで餅田理事より本年度（平成二十一年）行事予定発表。原田理事より第十九回海外研修本年度実施予定として十一月初旬「中国陶磁と長崎」を主題に竜泉方面を訪ねるとの発表あり。

○六月二十四日、夏（な）ごしさま。今年の夏も無事すごせるようにと諏訪神社に参拝、大きな「茅の輪」をくぐり帰宅。

○七月七日は「七夕」である。長崎年中行事抄を読む。「七月六日夜より牽牛織女を祭り西瓜鏡餅を供え。七日朝、青竹に五包の短冊・五色紙にて着物網などを作り竹にさげ屋上に立つ。当日家々「ひやしソーメン」を食す。（戦前の長崎では、八月七日を「七夕の日」としていました）

○七月二十三日・二十四日は市指定民俗無形文化財飯香浦地蔵盆である。お供えもののソーメン飾り、お接待のふくれ饅頭は有名である。

○七月二十四より二十七日は長崎八坂神社の「ギオン様」。ほうずきを買い、ビイドロのポロン・ポロンを買ったと先人がたの文章に記してあった。

○諫早史談会より「諫早史談」四十一号を戴く、有喜貝塚研究、天正十五年の諫早領研究、大村史料と諫早など、新資料の発掘が多くあった。

○長崎文献社より同社最近発刊の「明治七年の古写真集」（二、一〇〇円）水越武写真集「対馬」（二、九四〇円）、小崎侃木版画集「お蝶さん」（二、一〇〇円）を戴いた。全て楽しみに読める心あたたまる本であった。

○福岡西日本文化協会発刊の「西日本文化四三九号」を戴く。私は早速、長崎くんちに関係の深い瀬戸美都子氏の「松囃子」（博多津要錦から）と味酒安則氏の「天神さまと牛」に興味を引かれよませて戴いた。

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

カット　中村　繁勝　なんばんえびす